

W2-03 看護師に対する NPPV プログラムについて

日本医科大学附属病院集中治療部

渡邊 通枝

NPPV はマスクを介して換気できる非侵襲的人工呼吸器として登場し、従来の人工呼吸療法の合併症を回避し予後の改善ができる呼吸管理法として普及している。当施設では 1992 年に NPPV を導入し通算 1000 例を越え、現在は毎月 15 例前後の症例がある。導入当初 NPPV 適応患者は急性肺水腫が主であったが、現在は術後無気肺、周術期呼吸不全、気管挿管からの離脱など適応としている範囲は拡大している。

導入当初スタッフは NPPV 装着患者の管理・ケアに不慣れであり、トラブルの対応についても手探りの状態であり統一されたケアが提供できない状態であった。そのためプロトコールと看護基準の作成に至った。プロトコールの目的は継続的な治療とケア、患者の苦痛の緩和とした。観察点が明確になったことによりケアの統一化が図れるよ

うになり、教育の場面でも教育する側の見解が統一できた。プロトコールは病棟全体に浸透したが、対象患者の変化などによりプロトコールの修正が必要となった。観察点と医師に報告すべき点を更に明確化したことにより経験年数に関わらず統一したケアが出来るように改善した。

教育に関しては麻酔科医師・臨床工学士・看護師で協力し NPPV の操作方法と各モードについての講義、看護基準、プロトコール、チェックリストの使用方法を説明している。更に患者の目線から考えられるように看護師自ら NPPV を装着し各モードやマスクフィッティングによる違いを体験している。

この様な経過を経て、当院集中治療室での NPPV 装着患者の管理・ケアは導入当初と比し目覚しく改善が見られた。